



ばく通信

No. 17

2025. 6 月

特定非営利活動法人 発達障害児応援団 NPOばく



NPOを開設して18年目。5月1日現在までに220名の学習支援を行いました。ばくは、
①学習支援事業 ②発達相談事業 ③その他の事業を行っています。

学習支援事業

★指導担当と相談担当がペアになって1組の親子を支援するスタイル。入会時期は、年長児から小学6年生までですが、ニーズによっては中学生以降も継続支援を行っています。

★不登校支援…自分の気持ちや「したいこと」を伝えられる保護者以外の人や場があることが、その子の世界の広がりにつながることを実感しています。

発達相談事業

保護者やご本人の困り感を伺い、カウンセリングや進路等の情報提供をしています。検査希望が非常に増加しています。ニーズに応えるためにWISC-Vを購入しました。

その他の事業

講師派遣や勉強会だけでなく、支援者のスキルアップを目指して“若手支援職応援企画”を行い検査結果をどのように指導に生かすか等について助言を行っています。

スタッフからのメッセージ

「変化」をキーワードに、スタッフの振り返り文集の一部を抜粋・編集して紹介します。

A児（低学年）

入室当初、自分の気分で行動することが多く、周りの人の気分を害する言動が目立っていたA児。話しかけてもなかなかこちらを向こうとはせず、返事をしないこともあった。最初は、自尊心を傷つけないように見守り、A児のよさをみつけ、できる限りほめ、認めていった。しかし、変化のないまま数か月が過ぎた。ある時、気分がのらず、指導者に対して暴言を吐く出来事が起きた。そこで、「してはいけないことがある」と厳しく指導をした。再び、指導者の問いかけに答えない時期が続いた後、少しずつ相手の気持ちを気に掛けるようになった。指導2年目になると、自分の関心があることを楽しそうに話すようになってきた。行動には「していいこと」「してはいけないこと」をはっきり示すことが、自分をコントロールする上で大切であると実感している。

B児（中学年）

指導を始めて2年。指導1年目は絵を中心に本を見ていたB児。指導2年目、『ねこねこ日本史』をきっかけに、武将が大好きになり大きな変化が起きた。休みごとに古城めぐりを楽しむ「歴史オタク」になった。歴史研究で有名な先生監修の漫画を買ってもらっては読み続ける。

B児の興味を学びに活かす第2弾。AIに「武将や戦国用語を使って作問して」とオーダー。取り組みが悪かった算数問題だったが、瞬く間に10問を解き終えた。子どもの好きなものと学習を結び付けることの効果を改めて感じた。

Cさん（高校2年生）

この春、5年ぶりにCが母親と共に来室した。久しぶりにみるCは、時折はにかんだ表情をみせ、しっかりと大人になっていた。低・中学年の頃は、じっくり考えることが難しく、自分の気持ちを抑えられない為、行動化することが多かった。指導担当と相談担当の合言葉は、Cを「学びの土台に乗せること」。指導担当はCを学びに誘うため、様々な準備と工夫をしたが、苦労が水の泡になることが何度も続いた。しかし、指導担当の粘り強い関わりと自作教材の提示により、Cが高学年になると、学ぶ時間が増えたり、指導者の提案や指示を聞こうとしたりする等の変化が見え始めた。小学校卒業時には、「塾は嫌だけど、ばくなら通う」というCの希望により、中学生以降も継続指導を行った。

成果の見えない指導を諦めずに続けることは難しく苦しい。しかし、その子の成長を願い関わり続けることで、蒔いた種が芽吹き、変化がおきる。Cの来室は、教育や支援に携わる私たちに大切なことを思い起こさせてくれた。

Dさん（不登校支援）

3月 高校卒業証書を手保護者と共に笑顔で来室したD。転校やいじめをきっかけに不登校状態になったDが、医師の紹介で入室したのが中2の秋。対人不信や不安の強いDに対して「対人関係の再構築」を目標にしてコミュニケーション力を育てる支援を続けた。「指導担当との1対1の関係で興味関心を広げる」→「相談担当や他の指導者も参加したお茶会」と、対人関係を広げる指導を経て、通信制の高校に進学。進学後も、Dの気持ちの安定や困り感を解きほぐす会話を中心にして「高校卒業」を目指した。卒業証書は自己肯定感につながり、自己理解を深めて、支援を受ける社会参加のありかたをD自身が目指せるようになった。

Eさん（専門学校生）

Eは読み書きが苦手な8年間通室。Eの保護者から近況報告。「夏休みにバイトをして、今もバイトを続けている。その姿を見て、この子は働けるから大丈夫と心が軽くなった」と。

発達凸凹のある子の保護者は不安や心配が多い。さらに、今よりも、将来への不安が大きい。自立を願いながらも過干渉、過保護になる親もいる。自立に必要な力はコミュニケーション力、日常生活スキル、自己理解力、自己管理能力等がある。それらを実際場面で運用するには、本人の「自己選択・自己決定」が不可欠である。保護者が子どもの「自己選択」を意識して、見守ることができるようになるには、何がきっかけになるのだろうか。

E等の保護者の話から見えてくるのは、「子どもの変化に気づく」ことのようなのだ。「絶対に乗れなかったバスにイヤホンをして乗れた」「親の留守中に一人でカギをかけて出かけた」「校外学習に楽しく参加できた」等、「行動を広げるための工夫」「安全管理」「友達とコミュニケーションをとる」等の点で、子に信頼感を抱き、見守ろうとする気持ちが育ち、そして、心が軽くなっていく。子も親からの信頼を感じ取り「自己選択・自己決定」しながら新たなチャレンジを積み重ねていく。

ばくでは、「自立・自律」に向けて、親子が望ましい関係を築くよう、「小さな変化」を見逃さず、子には望ましい言動を賞賛し、保護者には労いと「行動の変化の意味」を伝えていきたい。

★ばくの活動は皆様からの賛助会費によって支援して頂いています。応援よろしくお願いします。

静岡県静岡市駿河区大和2丁目6番5号 東京堂ビル 305号電話（火～金曜日 15時～19時30分）

賛助会費振込先：郵便口座番号 00810-6-134767

発達障害児応援団NPOばく （一口1000円、何口でも）

E-mail:baku@orion.ocn.ne.jp

URL: <http://www.npobaku.sakura.ne.jp>